

37. 緑豆もやし花粉関連食物アレルギー症候群の診断における Gly m 4 の有用性

小児科学

宮本 学, 安藤裕輔, 加藤正也, 中山元子, 福田啓伸, 吉原重美

【目的】近年, 花粉-食物アレルギー症候群 (PFAS) の症例が増加しており, 我々は緑豆もやし PFAS の 5 症例を経験した. 成人では大豆食品 PFAS の診断として, 大豆由来のアレルギーコンポーネントである Gly m 4 特異的 IgE 抗体の有用性が報告されており, もやし PFAS の診断に有用な可能性がある. 小児もやし PFAS における Gly m 4 特異的 IgE 抗体の有用性, 及びもやしに含まれる Gly m 4 交差性成分の存在を検討した.

【方法】もやしが原因の誘発歴を有する 5 例 (12 歳から 15 歳, 女児 2 例, 男子 3 例) を対象に, 大豆粗抗原, Gly m 4, ハンノキ花粉, スギ花粉等の特異的 IgE 抗体価を測定した. また, 患者血清にもやし抽出液を添加後, Gly m 4 固相 ImmunoCAP 法を用いて抑制試験を行った.

【結果】Gly m 4 特異的 IgE 抗体価 (12.8-100 UA/mL) は, 大豆 (0.92-2.43 UA/mL) よりも全例で高値を示した. また, 花粉抗原も全例で陽性であった. 抑制試験では, 最高抑制率が 47.0-84.1% で, もやし抽出液の濃度に依存した抑制を認め, もやし抽出液において Gly m 4 に強い交差性を認めた.

【考察】大豆粗抗原特異的 IgE 抗体価と比較し Gly m 4 特異的 IgE 抗体価が高値であり, より Gly m 4 の特異性が認められた. また, 抑制試験によりもやし中に Gly m 4 交差性成分が含まれることが確認され, もやし PFAS の診断に Gly m 4 が有用な可能性が高いと考えられた.

【結論】もやし PFAS の診断において, Gly m 4 特異的 IgE 抗体測定は有用である.

38. Prader-Willi 症候群の心理行動症状—感覚プロフィールによる比較検討—

¹⁾ 埼玉医療センター こころの診療科,

²⁾ 岡田病院, ³⁾ 池沢神経科病院,

⁴⁾ 国立病院機構花巻病院,

⁵⁾ 埼玉医療センター 小児科,

⁶⁾ 中川の郷療育センター

齊間草平¹⁾, 窪田悠希²⁾, 高橋麻美³⁾,

石井惇史⁴⁾, 尾形広行¹⁾, 村上信行⁵⁾,

大戸佑二⁵⁾, 永井敏郎⁶⁾, 井原 裕¹⁾

【目的】Prader-Willi 症候群 (以下, PWS) の感覚プロフィールについては海外も含め十分な研究がされていないため今回検討した.

【方法】遺伝学的に確定診断された PWS 患者 51 名に対し, 日本語版感覚プロフィールの短縮版 (SSP-J), 異常行動チェックリスト (ABC-J), 広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度 (PARS) により評価した. 遺伝子型の差異を比較するために, DEL と mUPD で各評価尺度に関して t 検定を行った. SSP-J は感覚異常について「平均」「高い」「非常に高い」の 3 群に分類し評価でき, この 3 群に対して ABC-J, PARS が異なるかを検討するため一元配置分散分析を行った. 本研究は当院生命倫理会議における承認と保護者 (ならびに本人) 同意後に実施した.

【結果】遺伝子型の比較では, PARS, ABC-J とともに mUPD は DEL に比して有意に高い得点を示した. SSP-J の比較では, ABC-J, PARS とともに有意な群間差が見られた. 事後検定では, 「平均」と「非常に高い」の間に有意な得点差を認めた.

【考察・結論】DEL に比して mUPD は自閉傾向が強く, 行動異常が多いことが示唆された. また, 感覚異常が高いほど自閉傾向が強く, 行動異常が多いことも示唆する結果となった. PWS の心理行動症状には遺伝子型だけでなく感覚プロフィールによる評価も有益であることが考えられた. 今後は各評価尺度の下位尺度も含めて評価し, PWS の症状理解に努めたい.